

当院における新生児先天股脱検診の経験（第II報）

佐々木 信 男, 安倍 吉 則, 伊勢福 修 司
 高 橋 新, 半 田 勉, 肥 後 直 彦

はじめに

新生児先天股脱の診断は1962年 von Rosen が新生児先天股脱の診断と治療に関する論文を発表して以来、各地で広く行なわれているが、検診が普及されるにつれ、いわゆる見逃し例の存在など検診の信頼度について数多くの問題点が提示されるようになった。

仙台市立病院でも1972年以来、当院産科で出生した新生児に対し検診を行ない、1979年までの経験を1981年仙台市立病院誌に発表した。それ以降さらに経験を重ね、一定の知見を得たので報告する。

対象及び方法

1972年11月から1992年12月までに当院産科で出生せる新生児13,207名（♂6,774名，♀6,433名）を毎週、月、木曜日の2回、click sign, Barlow の test を行ない、2回の検査で所見の消失しないものに対しては von Rosen の方法による X 線撮影を行った。

しかし、1980年以降は X 線撮影は行っていない。

退院半年を経たから、全員に往復葉書で次の事項を調査し、追跡を行っている。

1. 4カ月股関節検診を受けましたか。
 - イ. 受けた
 - ロ. 受けない
2. 受けた結果はいかがでしたか。
 - イ. 異常なし
 - ロ. 治療の必要があるといわれた
 - ハ. 経過を見るようにと言われた

検診結果

検診児13,207名（♂6,774名，♀6,433名）のうち、第1回の検査でclick(+)であったものは416名（♂113名，♀303名）、barlow 110名（♂48名，♀62名）で第1回の検診での有所見児は526名（4.0%）であった。（click, Barlow 共に(+)の症例はclick例とした）。

2回目の検診ではclick(+)73名、Barlow(+)5名で第1回有所見児のclick(+)は82%、Barlow(+)は95%が所見が消失しており、2回目での有所見児は98名（0.6%）であった（表1）。

2回目の検査でclickが消失しなかった30名に von Rosen の方法で X 線撮影を行ったが、高度のclickが認められた2例に明らかな脱臼所見を認め、3名に脱臼を疑わしめる所見があったが、他の25名には異常は認められなかった。

この2名に対しては直ちに von Rosen 方式による治療を行った。疑いのある3名には治療を行なっておらず、この3名は4カ月検診では異常なしとの事であった。

追跡調査の結果

検診児は13,207名であったが、アンケートに回答のあったものは10,478名（79.3%）、住所不明で返送807名（6.1%）、回答がなかったもの1,922名

表1. 検査結果

検診児数	13,207 (男6,774, 女6,433)		
1回目所見あり	526 (4.0%)	click (+)	416
		Barlow (+)	110
2回目所見あり	78 (0.6%)	click (+)	75
		Barlow (+)	5

表2. 追跡調査の結果

検診児	13,207人
回答あり	10,478人 (79.3%)
回答なし	1,922人 (14.6%)
戻り	807人 (6.1%)

表3. 回答の内容

回答あり	10,478人
検診受けた	9,930人 (94.8%)
異常なし	9,574人 (96.4%)
要観察	321人 (3.2%)
要治療	35人 (0.4%)

(14.6%)であった(表2)。

回答のあったものでは、検診を受けた9,930名(94.8%)、受けない544名(5.2%)、死亡4名で、検診を受けた9,930名の結果は、異常なし、9,574名(96.4%)、要治療35名(0.35%)、要経過観察321名(3.2%)であった(表3)。

要治療と回答のあったものの新生児検診での所見を見ると、検診後直ちに治療を行なった2名を除いた33名のうち32名は異常所見がみられず、1名が1回目click(+), 2回目click(-)であった。

要経過観察321名では、1回目click(+)が5名であったが、すべて2回目には(-)となっており、他の316名は異常所見が認められなかった。

考 察

前回の報告で詳細な考察を行っているので重複は避け、要点のみを記す事にする。

新生児股関節脱臼の検査は本来なら生後1日目に行なうのが理想的であるが、本邦で行なわれている検診は生後1週間以内に行なわれているものが多い。

当院では、月、木曜日に行っているので、第1回目の検診は長くとも生後5日目に行なわれており、有所見児の2回目の検診も1週間以内に行なわれているので、検診の時期については問題はな

いと考えている。

新生児検診での異常所見発生率については今日まで多くの報告があり、Mackenzieの2.0%という高率の報告も見られるが、他の報告では大体0.2~0.8%の範囲にあり、当院での2回目検診での異常所見児0.6%はこの範囲内のものである。

新生児検診で異常所見がなく、数カ月後になって先天股脱臼が発見される、いわゆる見逃し例、late diagnosis症例が多く存在する事については多くの報告があり、新生児検診の信頼性が問題にされている。

Mitchell(1972)、Fredensborg(1976)は診断ミスはそれぞれ0.013%、0.007%に過ぎず、その信頼性は高いと評価しているが、Mackenzie(1972)は0.1%のミスを認めており、本邦の報告でも0.7~0.1%の見逃し例が存在するとの報告が多い。

従って現在では新生児検診後、数カ月を経てからの再検診が必要であるとの見解が一般的になっている。

当院での検診児で回答のあったもの10,478名のうち、4カ月検診を受けたものは9,930名であったが、そのうち検診時に所見がなく4カ月検診で要治療と診断されたものが、33名(0.3%)存在した。

当院での見逃し例のうちから4症例を提示するが、このように明らかな脱臼の所見のあるものが新生児検診で発見しし得なかったのかと考えると改めて数カ月後の再検診の必要性を強調せざるを得ない(図1, 2, 3, 4)。

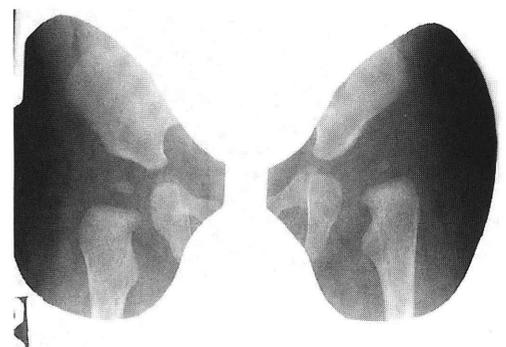


図1.

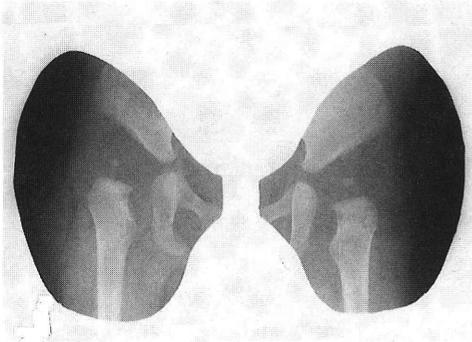


図 2.

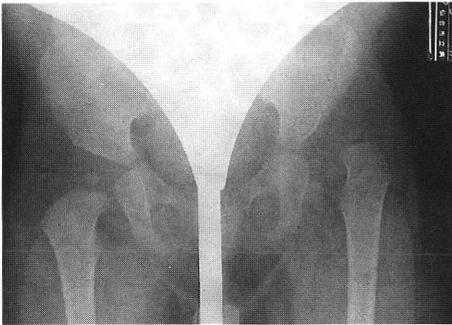


図 3.

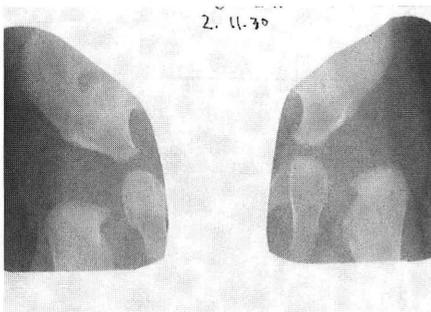


図 4.

宮城県は県内各地で4カ月の乳児全員に先天股脱検診を行っており、受診率は90%をこえている。今回の調査では回答のあったものの94.8%が検診を受けているのが、1991年から仙台市では4カ月検診は全員検診でなく、希望者のみの任意検診となった。

表 4. 4カ月検診受診率の推移

	回答あり	検診受けた	検診受けない
1972～ 1990年	9,483人	9,203人 (97.0%)	280人 (3.0%)
1991年	500人	388人 (77.6%)	112人 (22.4%)
1992年	495人	339人 (68.5%)	156人 (31.5%)

その結果かどうかは不明であるが、1991年の回答では回答あり500名のうち検診を受けたのは388名(77.6%)、1992年では495名中、検診を受けたのは339(68.5%)と受診率が低下している(表4)。

先天股脱の治療は、早期発見、早期治療が原則であるので、4カ月乳児検診の受診率の低下は先天股脱の発見を遅れさせる症例を発生させる危険性があるのではないかと危惧している。

結 語

1) 1972年11月から1992年12月まで当院産科にて出生せる新生児13,207名の新生児先天股脱検診を行い、2回目の検査でclick (+) 73名(0.55%)、Barlow (+) 5名(0.04%)が認められた。

2) 半年後のアンケート調査の結果、回答のあったものは10,478名(79.3%)で、そのうち9,930名(94.8%)が4カ月検診を受けており、新生児検診で異常が認められなかった33名(0.3%)が要治療と診断されている。

3) 仙台市の4カ月検診の方針変更により、1991年、1992年の受診率が低下しており、先天股脱の発見が遅れるものが生ずる危険が危惧される。

文 献

- 1) Barlow, T.G.: Early diagnosis and treatment of congenital dislocation of the hip. J. Bone Joint Surgery 44-B, 292, 1962.
- 2) Fredensborg, N.: The result of early treatment of typical congenital dislocation of the

- hip in Malmo. J. Bone Joint Surg. **58-B**, 272, 1976.
- 3) 長谷川幸治 他：先天股脱の新生児検診。整形外科 **39**, 488, 1988.
 - 4) 井村慎一 他：新生児股関節検診におけるいわゆる見逃し例について。臨床整形 **10**, 486, 1975.
 - 5) Mackenzie, I.G. : Congenital dislocation of the hip. J. Bone Joint Surg. **54-B**, 18, 1972.
 - 6) Mitchell, G.P. et al. : Problems in the early diagnosis and management of congenital dislocation of the hip. J. Bone Joint Surg. **54-B**, 4, 1972.
 - 7) 三宅 詢 他：乳児先天性股関節脱臼の治療経験。臨床整形 **9**, 277, 1974.
 - 8) 野口耕司 他：新生児先天股脱の診断と治療の検討。整形外科 **29**, 219, 1978.
 - 9) Rosen, S. von : Weitere Erfahrungen in der Behandlung der Huftgelenksverrenkung bei Neugeborenen. Z. Orthop. **99**, 18, 1964.
 - 10) Rosen S. von : Diagnosis and treatment of Congenital dislocation of the hip joint in the newborn. J. Bone Joint Surg. **44-B**, 284, 1962.
 - 11) 佐々木信男 他：当院における新生児先天股脱検診の経験。仙台市立病院医誌 **2**, 15, 1981.
 - 12) 渡辺 直 他：新生児先天股脱における late diagnosis 症例の分析。整形外科 **38**, 1411, 1987.
 - 13) 山田順亮 他：最近の新生児股脱関節検診において見逃された先天股脱症例の検討。整形外科 **37**, 15, 1986.